

今回、日本放射線技術学会の海外研修派遣制度により、スタンフォード大学での研修に参加し貴重な体験をすることができた。以下、この研修に対する報告書を与えられたテーマ沿って記す。

1. 学会の国際化について

学会の国際化については、もう議論するべくもなく当然の流れだと考える。私がこの研修に参加した理由も、日本だけでなく海外の研究がどういったものか知りたいと思ったからである。実際、スタンフォード大学の講義を受けてみて、非常に進んだ研究をしていることがわかり、日本だけでなく海外へ目を向けなければならない重要性を再認識した。次第である。また、学会の国際化については、日本放射線技術学会だけでなく、他の学会も同様な方向性にあり、国際化は避けられない課題である。実際、日本放射線技術学会でも日本語の雑誌だけでなく、Radiological Physics and Technologyという英語雑誌を発行しており、国際化へ進んでいると考える。

2. 学術大会のあり方について

「学会の国際化について」と重複する内容になるが、学術大会も国際化の方向に進むべきである。今研修の夜の熱いディスカッションでも議題にあがったが、演題発表はスライド、発表とともに英語で行うようになるのではないかと考える。研修で聞いた話では、現在の学生は、英語で発表を行う人が少なくないらしい。そう考えれば、英語での発表を続けていけば必然的に5年、10年先には英語で発表を行うこと自体、標準的になっている可能性がある。それに最初から英語で演題発表や論文作成をするようにしておけば、わざわざ海外用につくる必要もなくなり、簡単になると思う。ただ学術大会において、英語のみのセッションを作っても、参加者が日本人ばかりでは違和感があり、海外から日本の学術大会に足を運んでもらえるよう魅力的な大会にしなければならない。そのためには、演題発表だけでなく、最新の研究の紹介や、教育講演などのプログラム作成が必要であろう。

3. 研修で得たことを今後どのように活かすか

今回の研修で得たものは、スタンフォード大学の実際の臨床と現在の研究、これから先の画像検査や治療につながるものなどさまざまであった。臨床で行われている検査や治療については、日本で行われているものとそれほど違わないか、または日本の方が進んでいるのではないかと思え、自分が行っている日常の検査にも自信をもって望むことができそうであった。今回、私が最も興味があった7TMRIは撮像については少ししか見ることができず、残念であった。マルチ送信技術をもってしても7Tでは感度ムラなどがあり、まだ研究、開発の余地があると感じた。ただ、7TMRIは非常に高いSNR、コントロールできればすばらしいコントラストが得られるT2*などがあり、将来的にはMRIはますます高磁場になる可能性があり、今後の参考になった。また、DTIやDKI、QSIなどMRIのいろいろな話を聞くことができ有意義なものとなった。そして、分子イメージングやConnectomeと呼ばれる大脳の接続の強さを調べる新しい方法などについての話を聞くことができ、将来、放射線技師の行う業務は多方向に広がっていくのではないかと感じた。

今回の研修で得られた一番のものは、一緒に研修に参加したみなさまとのつながりでないかと思う。日本全国から集まつた、非常に熱心なメンバーが午前の講義、午後の見学、夜の討論会と、一週間という短い時間ではあったが、濃密な時間を共有することができた。寮からの通学ではみんなで自転車に乗って走ったり、とんでもない量の食事を分けて食べたり、少し前の私なら想像もできない楽しい出来事であった。このつながりをこれからも大切にしていきたい。

このような研修の機会を与えていただいた日本放射線技術学会、協力していただいたGEHC-Jのみなさま、個性あるメンバーをばっちりまとめあげた田中利恵様ほんとうにお世話になりました。また、今回の研修に快く参加させていただいた、製鉄記念八幡病院の内田技師長はじめ、放射線部のみなさまに感謝申し上げます。



(研修の休憩時間、右から3番目が筆者)